

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

「あなたは仕事と家庭を両立できますか？」という問いは、ふつう男には向けられない。「両立」は、女だけの課題であって、そのためには女は二人前の能力と努力を支払われなければならない。男たちはとくに「仕事も家庭も」手に入れているというのに、彼らのその「両立」は、人並み以上の努力の結果だろうか？ ただの男が当たりまえのようにして手に入れている仕事と家庭と子どもを、女が手に入れようと思えば人並み以上の努力を払わねばならないなんて、どこかおかしいんじゃないか。

もちろん、ただの男が「仕事も家庭も」両立してこれた背景には、女に家庭責任を全部押しつけたせいがあるが、世の中では、大して能力のないただの男が、大して努力も払わないでちゃんと仕事を得ているし、家庭も子どもも持っている。だとしたら、ただの女が、大して努力をしなくても、「仕事も家庭も」両方望んで、どこが悪いだろう。「仕事も家庭も」パートⅠが、エリート女の自己解放だとしたら、「仕事も家庭も」パートⅡは、ただの女の居直り解放だ。

とくべつな女でなくても、どんな女でも、仕事も家庭も両方持てて当たりまえ、というところまで、女性解放の考え方は進んできている。^{注1}フェミニズムのすそ野は大きく広がって、大衆化した。そうなれば、ただの女が「仕事も家庭も」持てるための条件が必要になってくる。

かつて「仕事も家庭も」手に入れようとしたエリート女たちは、自分のがんばりで両立させるほかなかった。職場に出れば、家庭を顧みず男なみに働くことを要求された。そうしてはじめて、一人前の労働者だと認めてもらえた。

そういう女性にとって、「お子さんが病気だからすぐに引き取りに来て下さい」という保育所からの電話は、仕事の妨げになる①サイヤクと聞こえただろう。おそろおそろ早退していく自分の背中に、②ドウリョウウ男性の冷たい視線を感じ、ああこれでまた責任ある仕事をまわしてもらえない、と思う。女性たちは、こんな時、病児保育があつたら、と切実に望んだものだ。

③子どもの側からすれば、それでなくても病気で不安に④オチイっているのに、行きなれた保育園じゃなくなじみのない病児保育施設に放りこまれるのは、もっとかなわないにちがいない。病児保育を、というのは、大人の側の要求だ。いや、母親本人の要求というよりも、職場の側の要求だ。病児保育の代わりに、堂々と休みをとって子どもの側にいてやって、どこが悪い。どの

みち仕事は他人が代わっても大差ない、という程度のものだ。それにくらべれば、子どもにとって自分はかけがえのない存在じゃないか。

病児保育を、という要求は、今では子どももの看病休暇を、という要求にとって代わりつつある。この変化には、実は大へん大きな発想の転換がともなっている。職場の中で男なみに働いてはじめて一人前、という考え方から、女たちはオリはじめている。生活の中で自分にとって何が大事かを考えれば、家庭を切り捨てての労働なんて、まっぴらごめん、と女たちは思う。女たちは、仕事なんて家庭を犠牲にしてまでやる値うちのあるものだろうか、と思っている。仕事優先の考え方は、職場のつごうで、わたしのつごうじゃない。そもそも男たちが、仕事優先で家庭を顧みずに仕事にうちこんで来られたのは、家庭責任を女に任せっきりにしたおかげじゃなかったのか。

里心労働者、という言葉がある。職場で晩のオカズのことを考えている女性のことを言うのだそうだ。生活者なら、晩のオカズは大問題だ。男が晩のオカズのことを考えずにすんでいるのは、ヨメさんに任せっぱなしにしているおかげにほかならない。里心労働者でどこが悪い——これが女の論理である。

女は家庭を支えながら仕事をしている。仕事を愛しているが、家庭を犠牲にしてまでうちこむ値うちのあるものとは思わない。これが健全な生活者のバランス感覚というものだ。「⑤男なみ」を要求されるのはまっぴらだ、「⑥女なみ」でどこが悪い——女の自信と実力は、ここまできている。

だからと言ってこれを、女性差別の口実にされるのは困る。男と女の間の平等を達成するには、二と通りの方法がある。一つは、女が「男なみ」になることである。長い間、女性解放は、この路線で考えられてきた。だから、男女平等とは、女が女らしさを失って男性化すること、と⑦タシラク的に考えられてきた。もう一つの方向は、逆に男が「女なみ」になることで両性が平等になる方法だ。女はとつくに職場進出を果たし、男社会の中に食いこんだ。今度は、男たちが、家庭に戻ってくる番じゃないのか。男たちの側で、「仕事と家庭」の両立が、問われるべきじゃないのだろうか。

念のために付け加えておくが、男の「女なみ」化は、安直に考えられているように、男が「女々しく」なること、男の中性化を

意味しない。逆に、男らしさの囲いでやっとな守られた男のやわな^{注2}アイデンティティに、ほんとうの自信を回復させてあげる道だ。まとめて見よう。女性の解放の道すじは次のような段階を追って進んできた。

第一期「仕事か家庭か」

第二期「仕事か子どもか」

第三期「仕事も家庭も」パートⅠ

第四期「仕事も家庭も」パートⅡ

私たちは現在第⑧期にいる。が、⁹あいかわらず、女性解放のイメージを、古めかしいⅠ期やⅢ期の^{注3}ステレオタイプでとらえる人々がいる。頭を切り換えなければ、何が解放か、についての議論は混乱するばかりだ。

Ⅰ～Ⅲ期からⅣ期への転換には、大きな飛躍がある。それは、価値観の転倒と言ってよい発想の転換だ。

Ⅰ～Ⅲ期の女性解放は、ひたすら女の努力によって達成されるものだった。それは女の側の問題であり、女だけの問題であったのである。第Ⅳ期には、女の努力だけでは限界があること、むしろ男の変化こそがかんじんかなめなのだ、ということがわかってくる。つまり、ただの女の解放のためには、男と女と子どもを含めた社会の変化が不可欠なのだ。女だけの問題ではなくなっている。

⑩、第Ⅰ～Ⅲ期から第Ⅳ期へのこの転換には、性別役割分担のはい止を明言した一九七五年の国連女性差別^⑪テツパイ条約が、大きな力を果たしていることは、もう多言を要さないだろう。

女の集まりで話をするたびに、真剣で熱気を帯びた彼女たちに向かって、口がさけても言いたくないことばがある。それは「がんばって」という一言だ。私は「がんばって」と他人に言うのもイヤだし、他人から言われるのもイヤだ。がんばりたくないかないのだから。それでなくても、女はすでに十分がんばってきた。がんばって、がんばって解放がえられるとすれば、当然すぎる。今、女たちがのぞんでいるのは、ただの女が、^⑫、当たりまえの女と男の解放なのである。

『女という快楽』上野千鶴子

注1 フェミニズム・・・女性の社会的・政治的な権利を拡張しようとする主義。

注2 アイデンティティ・・・自己の存在証明。

注3 ステレオタイプ・・・行動や考え方が、型にはまっていること。

問一 傍線部①・②・④・⑦・⑪の片仮名を漢字に直しなさい。

問二 空欄部③・⑩に入る語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア したがって イ そして ウ あるいは エ しかも オ しかし

問三 傍線部⑤「男なみ」・⑥「女なみ」は、それぞれどういうことをいっていますか。文中の言葉を使って、三十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問四 空欄部⑧に入れる最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ー イ Ⅱ ウ Ⅲ エ Ⅳ

問五 傍線部⑨「あいかわらず」は、どの単語にかかっているかを書きなさい。

問六 空欄部⑫に入る文として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア たつぷりの自由時間を持てる生活を楽しめる

イ 男社会の中で男なみにがんばって働くことのできる

ウ 結婚したら家事が今までよりも一層気楽にできる

エ がんばらず仕事も家庭も子どもも手に入れられる

オ 仕事を持たないほうがよい、持つべきではないという

問七 「女性解放」に対する筆者の考えを文中の言葉を使って、五十字以内でまとめなさい。(句読点は字数に入れません。)

問八 本文につける題名として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 病児保育の重要性
- イ エリート女性の解放
- ウ 里心労働者の正当性
- エ 仕事優先の考え方
- オ 「女なみ」でどこが悪い

このページには問題はありません

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（本文の表記の一部を変えています。）

〔北海道の山村で育ち、高校卒業後二年間調律の専門学校で学んで、調律師として楽器店に就職したばかりの「僕」は、先輩調律師の一人である柳さんの調律先に見習いとして付いていくようになる。〕

町が華やいで見えるのは、きつとオンコの実が色づいたせいだ。街路樹の赤で、見違えるように通りが明るい。山中の実家で暮らしていた頃は、道端のオンコやコクワ、ヤマブドウが色づくのを待って、学校の行き帰りに一粒ずつ口に入れて歩いた。

「誰も食べないんでしょうか」

隣を歩く柳さんに聞くと、え、と聞き返された。

「もしかして街路樹って公共のものだから取っちゃいけないことになってるんですか」

「何の話？」

「オンコです。今年は秋が遅いですね」

そう言ってから、街ではオンコをイチイと呼ぶのだったと思い出した。

「よく知ってるよなあ」

柳さんが感心したように言う。

「木の名前なんて俺ぜんぜん知らないよ。そういうのってどこで覚えるの？」

どこでだろう。意識したこともない。気づいたら知っていた。まわりにあったからだ。サケやホツケやアメマスを見分けるのとおなじように普通の、知識と呼ぶほどでもない知識だと思っていた。

① 木の名前を知っていても、それだけのことで。役に立つこともありません」

風の名前や雲の名前を知っているほうが、山ではずっと役に立った。変わっていく天気をほぼ正確に予報することができる。

②木は木だった。僕が名前を知つていようがいまいがおかまいなくそこにあつて、春には芽を出して葉を生やし、秋になれば実をつけた。実は③ウレて、やがて木から離れる。子供の頃、秋の日に森で遊んでいると、そこかしこでぼとぼとと実の落ちる音がした。それは僕の心をひっそりと落ち着かせてくれた。僕がいてもいなくても、木の実が落ちる。そう思うと安らかな気持ちになつた。ぼと、ぼと、という音を聞きながら安心して遊んだ。十歳になつた秋、このままこの森に倒れてたとえ呼吸を止めてしまつても木の実が落ちるのだ、と思つたら開放感が足下からじわじわと這い上がつてきた。僕は自由だ、と思つた。けれども、ここで朽ち果ててしまうこともできる自由の背後から、寒さや空腹がしのび寄る。するとたちまち生身の不自由さを思い出すのだつた。

「花の名前もわかるんだろ？」

聞かれて我に返る。花の名前。山に咲く花なら知つているものもある。でも花屋で売られている花はわからない。

「花の名前を知つてゐるってかっこいいよなあ」

「そうでしょうか」

「そうだよ」

柳さんは続けた。

「④知らないつていうのは、興味がないつてことだから」

花の名前の話をしていはずなのに胸が痛んだ。音楽への素養のなさを指摘された気がした。花の名前よりも、木や雲や風の名前よりも知つていなければならぬことがある。先ほど訪ねた客先で、有名ならしいピアニストの音色について質問され、僕は何も答えられなかった。

「⑤俺の見る景色とは違うものが見えてるんだろ？」

柳さんは言った。ほんとうにそう思う。僕には見なきやいけないものがたくさんある。

「木の名前を知つてゐるのは、ただそれだけのことなんかじゃないさ。実際、⑥役に立つと思つ」
なくさめてくれているのだろうか。少なくとも、調律の役に立つことはないだろう。

「話題が⑦トボしいより豊富なほうがいい、という意味ででしょうか」

柳さんは客先での評判がいい。むろん、調律の技術が高いことが第一の理由だろうけれど、話が上手なことも一因だろう。相手のどんな話題にもついていけるし、気の⑧キいた会話を続けられる。そのたびに僕はせいぜい隣でうなずいているぐらいしかできない。

「話題とか教養とかそういう意味じゃなくてさ。もつと調律の本体に役に立つと俺は思う」

調律の本体。どういうことか、よくわからない。僕はまだそのまわりをぐるぐるまわっているだけの見習いだった。

⑨「細部を思い浮かべることができるっていうのは、案外重要なことなんだ」

わからない顔をしていたせいも、柳さんはちよつと考えてから例を挙げてくれた。

「たとえば」

柳さんの「たとえば」は難しい。たとえばが遠回りなことが多いのだ。うまく真ん中にたどり着くには聞く側にも技術が必要だということがこの頃やつとわかってきた。

「柳さんは、チーズの種類やゆで卵のかたさを例にして、調律の音を決めるときに、お客さんから言われた言葉について、ぱつと思いつくイメージが多ければ多いほどいい、という話をする。」

「要するに、好みの問題なんだ。ピアノにどんな音を求めるのか、それはお客さんの好み次第だよ」

ようやく話がつながった。⑩直前に訪れたお客さんのリクエストを、柳さんは不満に感じているらしかった。といっても、かたゆで卵にしてください、と言われたわけではない。かたい音にしてください、と言われたのだ。柳さんの⑪ヒユはわかりにくい。

「蒸したアスパラガスに添えるのは、温泉卵に近いようなところのゆで卵がいい。それをソースのようにからめて食べるとおい

しい。だろ？お客さんはそれを食べたことがあって、その上でなお、かたゆでがいいといっているのか、もしくは、ゆですぎた卵しか知らなくてかたゆでがいいと言っているのか、その辺の見極めが難しいんだ」

わかりにくいけれど、なんとなく、わかった。

「かたい音がいいとか、やわらかい音がいいとか、何を基準にしているのか確認しないと」

そのときのお客さんは、できるだけかたい音で、と注文をつけてきた。ところが、できあがりの音を聴いて、なんだか音がゴツゴツしている、と不満そうだったのだ。結局、すべての音を少しずつ調整し直して、余計な時間と手間がかかった。

「やわらかい音にしてほしいっていわれたときも、疑わなきゃいけない。どのやわらかさを想像しているのか。必要なのはほんとうにやわらかさなのか。技術はもちろん大事だけど、まず意志の疎通だ。できるだけ具体的にどんな音がほしいのか、イメージをよく確かめたほうがいい」

水から八分のゆで卵なのか、十一分くらいのそれなのか。あるいは春の風のやわらかさか、カケスの羽のやわらかさか。たとえイメージを共有できたとしても、そこからが遠い。そのやわらかさを具現化するのが調律師の仕事なのだ。

「^⑩言葉を信じちゃだめだっていうか、いや、言葉を信じなきゃだめだっていうか」

ひとりごちのように言って、柳さんは高い空を見上げた。青く澄んだ空の向こうに目指すところがあるみたいだ。だとしたら、柳さんよりずっと下にいる僕は、柳さんよりもっともっと高く見上げなきゃいけない。果てしないところを睨むには首が疲れてしまつて、街路樹のオンコの赤い実に目を戻した。

(『羊と鋼の森』宮下奈都)

問一 傍線部①「木の名前を知っていても、それだけのことです。」とありますが、このときの「僕」の気持ちとして、最も適当なものの中から選び、記号で答えなさい。

ア つまらない知識を、大げさにほめる柳さんにはかにされたように感じる気持ち。

イ 街の人である柳さんが、ごく普通の知識ももっていないことをあきれる気持ち。

ウ 実用的でもないただの知識を、柳さんに感心されたことを不思議に思う気持ち。

エ 柳さんに一目置かれたうれしさをそのまま素直に表現できず、謙遜する気持ち。

オ 柳さんがつまらないことをしつこく話題にするので、もういい加減にしてほしい気持ち。

問二 傍線部②「木は木だった。」とありますが、「僕」にとって森の木はどのような存在であったことがわかりますか。解答欄に合うように十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問三 傍線部③・⑦・⑧・⑩のカタカナを漢字に直しなさい。

問四 傍線部④「知らないってというのは、興味がないってことだから」・傍線部⑤「俺の見る景色とは違うものが見えてるんだろ」・とありますが、「僕」はこの言葉から、自分の仕事についてのどのように考えましたか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 柳さんの言葉から、花や木の話にかこつけて、「僕」がいつまでも一人前にならないことを責める気持ちが隠されていることを感じ、はやく調律師としてひとり立ちしたいと感じている。

イ 柳さんの言葉に、花や木のたくさんある山村での生活のほうが「僕」に合っているのではないかと言われたような気持ちになり、自分の調律師としての将来に迷いを感じはじめている。

ウ 柳さんの言葉から、さっきの客先での自分の頼りなさを強く感じ、有名なピアニストの名前も知らなかった「僕」は、もしかしたらあまり音楽に興味がないのではないかと不安になっている。

工 柳さんの言葉は、ただ木や花の名前の話をして、よくわかっていても、「僕」は一人前には遠く、音楽や調律について知らなければいけないことがまだまだ多いことを身にしみて感じている。

オ 柳さんの言葉に、「僕」がまだまだ調律師としての技術も知識も足りないと言われたように感じたが、「僕」はそんなことはなくきちんと興味も熱意もあるのだと反論したいような気持ちになっている。

問五 傍線部⑥「役に立つ」とありますが、この言葉の意味について説明した次の文の空欄部A・Bに当てはまる言葉を、それぞれ指定した字数で文中から抜き出さない。(句読点は字数に入れません。)

「僕」は、この言葉を聞いて、A (六字) という意味で、接客に役立つと思ったが、柳さんはこれをB (五字) に役に立つと考えている。

問六 空欄部⑨に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア なるべく具体的なものの名前を知っている

ウ なるべくたくさんの美しいものを見て

オ なるべく木や花のあるところに出かけるようにして

問七 傍線部⑩「直前に訪れたお客さんのリクエスト」とありますが、柳さんはこのリクエストについてどのように考えていますか。柳さんの考えを説明した次の文の空欄部A・Dに当てはまる言葉を、それぞれ指定した字数で文中から抜き出さない。

(句読点は字数に入れません。)

このお客さんのリクエストは、A (十字) ということであつたので、柳さんはそのように調律したが、できあがつた音にお客さんは不満そうだった。そのためにB (八字) が必要となつた。こうなつた原因は柳さんのC (二字) の問題以前に、D (五字) ができていなかったためだと考えている。

問八 傍線部⑫「言葉を信じちゃだめだっというか、いや、言葉を信じなきゃだめだっというか」とありますが、この言葉に込められた意味として最も適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア お客様の求める音は、言葉では正確に表現されることが多い。それはお客様が音について正しい理解がないことが多いためだ。調律師は音のプロとして、時には相手の表現しきれない意味までくみ取って、正しい音を作るのが仕事なのではないか。

イ お客様は、気が変わりやすいものだ。相手がイメージしている音は、こちらの経験と想像力で具体化しなければならぬ。調律師は、そのようにして調律された音に相手が納得できるように、たとえ話をしたりして言葉で説明してあげなくてはならないのではないか。

ウ お客様が求める音を理解するためには、相手の言葉の表面だけをとらえてはいけない。調律師は相手がどのような意味でその言葉を使っているのかを理解できることを信じて、言葉の表現を積み重ねて具体的にイメージを共有しようとしなければならぬのではないか。

エ お客様の求める音は、必ずしも調律師のイメージする音と一致しないことが多い。相手の言葉をまずは疑ってかかり、その言葉の裏側にどのような意図が隠されているのかを想像して、その音を具現化する技術がともなって初めて一人前の調律師と言えるのではないか。

オ お客様がどんな音を求めるかは、その人の好みによるものだ。好みは個人的なものであるから、音の性質というものは言葉では到底表現しきれない。調律師は、言葉には限界があるということを知って、自分の信じる音を基準にして調律していかねばならないのではないか。

このページには問題はありません

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

注^りよしやう^ほ
呂尚父が妻、家を①住みわびて、離れにけり。呂尚父、王の師となりて、②いみじかりける時、かの妻、帰り来て、もとのごとくあらむことをこひのぞむ。その時に、呂尚父、桶一つを取り出でて、「これに水入れよ」といふままに③入れつ。「こぼせ」といへば、こぼしけり。さて、④もとのやうに返し入れよ」といふ時、妻笑ひて、「土にこぼせる水、⑤いかでか返し入れむ」といふ。呂尚いはく、「⑥なんぢ、われに縁尽きしこと、桶の水をこぼせるに同じ。いまさら、いかでか帰り住まむ」とぞいひける。

(我慢できず)

これ、ものねたみにはあらねども、貧しき世を忍びえず、心短きたぐひなり。

『十訓抄』

注 呂尚父・・・周の文王の賢臣。「父」は年長男子への尊称。

問一 傍線部①「住みわびて」とは「住み続けることをつらく思つて」という意味ですが、何をつらく思つたのですか。文中から四字で抜き出さなさい。

問二 傍線部②「いみじかりける時」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 鼻高々で思い上がっていた時 イ 孤独で寂しい思いをしていた時

ウ 自分の無能さを痛感していた時 エ 大変富み栄えていた時

問三 傍線部③「入れつ」の主語は誰ですか。文中の語を使って答えなさい。

問四 傍線部④「もとのやうに」を現代仮名遣いに改めて、すべて平仮名で書きなさい。

問五 傍線部⑤「いかでか返し入れむ」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 何とかして戻しましょう。 イ だれが戻すのですか。

ウ 戻すことはできません。 エ 何とかして戻してください。

問六 傍線部⑥「なんぢ、われに縁尽きしこと、桶の水をこぼせるに同じ。」について、どこが同じなのかも付け加えて、意味を書きなさい。

問七 この話は次のどのことわざのたとえ話ですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 籠かごで水をくむ イ 水泡すいぼうに帰す ウ 覆水盆ふくすいぼんに返らず エ 焼け石やけいしに水